

ピロリ菌検査手帳

この手帳は、中学生を対象とした
ピロリ菌の尿検査の結果、「陽性」と判定された方へ
配付しております。

ピロリ菌検査の結果を記入して、
今後の健康管理にお役立てください。

氏名

<はじめに>

ピロリ菌（正式名称はヘリコバクター・ピロリ）は、
胃の中に生息している細菌で、近年、多くの研究により、
慢性胃炎や胃・十二指腸潰瘍、さらには、胃がんなどの原因と
なっていることが判明しました。
特に、日本人の胃がんの98%が、ピロリ菌の感染が原因である
とされています。

ピロリ菌の感染経路は、幼少時における経口感染と推察されており、
ピロリ菌を除菌すると胃がんの発症が抑えられることが認められていますが、
その除菌効果は、年代によって異なっており、
感染期間が短い、若い世代のうちに除菌すると、
ほぼ100%効果があるとされています。

この手帳は、ピロリ菌尿検査の結果、
「陽性」と判定された生徒および保護者の方が、
ピロリ菌に対する知識をより一層深められ、
今後の健康管理に役立てていただけるよう作成しましたので、
是非、家族の皆様と一緒に読んでいただければ幸いです。

< 目 次 >

ピロリ菌検査の記録	1
除菌の記録	2
尿検査の結果、陽性と判定された方へ	3
尿素呼気試験とは	4
二次検査の結果、陰性と判定された方へ	4
二次検査の結果、陽性と判定された方へ	5
ピロリ菌の除菌治療について	6
1) 除菌治療までの流れ	6
2) 除菌治療の考え方	6
①保険適用による除菌治療	7
②自由診療による除菌治療	7
③その他	8
【除菌治療の方法】	8
【除菌治療の標準的な流れ】	9
【除菌治療の副作用と健康被害について】	9
【副作用が生じた場合の対応について】	10
【除菌することで起こる病気】	10
【ピロリ菌感染による将来の病気を 予防するためにお願いしたいこと】	10

ピロリ菌検査の記録

●一次検査（尿検査）の結果は 陽 性 でした。

以下の検査、治療について、忘れないように記入しましょう。

●二次検査（尿素呼気試験）実施日： 年 月 日

検査結果は _____ でした。
（尿素呼気試験UBT値（ ⁰/100）

検査実施医療機関名 _____

上記、二次検査の費用負担はありません（無料）。

【自己負担で実施した検査内容の記録】

●その他の検査 実施日： 年 月 日

検査内容は _____ です。

検査結果は _____ でした。

検査実施医療機関名 _____

除 菌 の 記 録

●一次除菌の開始日： 年 月 日

一次除菌の判定日： 年 月 日

一次除菌薬の名称

除菌後の再検査法：尿素呼気試験・抗体測定・便中抗原・
迅速ウレアーゼ・組織鏡検・培養

判 定：陽性・陰性

血清抗体価(U/mL)

尿素呼気試験UBT値 (%/100)

実施医療機関名 _____

●二次除菌の開始日： 年 月 日

二次除菌の判定日： 年 月 日

二次除菌薬の名称

除菌後の再検査法：尿素呼気試験・抗体測定・便中抗原・
迅速ウレアーゼ・組織鏡検・培養

判 定：陽性・陰性

血清抗体価(U/mL)

尿素呼気試験UBT値 (%/100)

実施医療機関名 _____

尿検査の結果、陽性と判定された方へ

～二次検査（尿素呼気試験）を受けましょう！～

尿検査の正確性は100%ではなく、陽性と判定された方のうち、約35%が偽陽性（本当はピロリ菌に感染していない）であることがわかっています。

そのため、尿検査陽性のお子さんは、ピロリ菌に感染しているかどうかを、さらに詳しく調べる二次検査（尿素呼気試験）を行うことをお勧めします。

二次検査を希望する方は、同封の「二次検査および除菌治療実施医療機関一覧」から医療機関を選び、受診の予約をしてください。

二次検査の費用負担はありません（無料）。

なお、二次検査は、一次検査実施年度と同一年度内に受診してください。
（年度を超えて受診した場合は、無料で受けられません）

【二次検査受診時の注意点】

- 1) 二次検査実施医療機関について
 - ・同封の「二次検査および除菌治療実施医療機関一覧」から医療機関を選び、受診の予約をしてください（一覧に記載されていない医療機関で二次検査を行った場合には、検査料は無料になりませんので、ご注意ください）。
 - ・ご予約の際は、「中学生のピロリ菌二次検査です。」と伝えてください。
- 2) 受診の際の持ち物等
 - ・受診の際は、同封の「二次検査同意書」、「二次検査問診票」と保険証を忘れずにお持ちいただき、医療機関窓口（受付）に提出してください。
 - ・「二次検査同意書」には、必要事項を記入の上、ご持参ください。
- 3) 検査は空腹時に行います
 - ・二次検査（尿素呼気試験）は、空腹時に行う検査です。検査の予約時間によって、食事制限の指示がありますので、予約の際には、必ず、食事についての指示をご確認ください。（食べてしまうと検査ができません。）

尿素呼気試験とは？

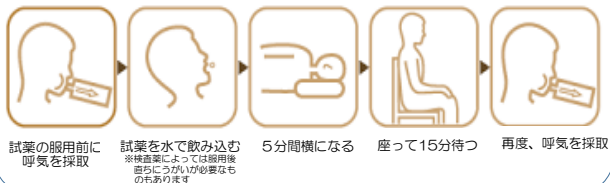
ピロリ菌の有無を調べる検査です。

ピロリ菌が持つウレアーゼという酵素は、胃の中の尿素を分解して、アンモニアと二酸化炭素を発生します。二酸化炭素は速やかに吸収され、血液から肺に移行し、呼気(吐いた息)中に炭酸ガスとして排出されます。この原理を利用して試験薬(人体に害のない尿素)を服用して行う検査を尿素呼気試験といいます。

ピロリ菌に感染している場合は、尿素が分解されるため呼気(息)に二酸化炭素が多く排出されます。一方、ピロリ菌に感染していない場合は、尿素が分解されないため二酸化炭素は呼気(息)に排出されることはほとんどありません。

試験薬は、ピロリ菌に感染している場合は呼気から排出され、ピロリ菌に感染していない場合は尿から排出されます。また、尿素は、体内にも存在する物質ですので、試験薬による副作用やアレルギーの心配はありません。

尿素呼気試験の手順(空腹時におこないます)



二次検査の結果、陰性と判定された方へ

医療機関で二次検査(尿素呼気試験)を受けた結果、陰性と判定された方はピロリ菌に感染していないと考えられます。しかし、将来、ピロリ菌検査の機会があるときは再度検査を受けてください。また、症状(胃が痛い、胸がムカムカするなど)がある場合などは、この手帳を持参した上で、医療機関を受診し、ご相談することをお勧めします。(本手帳1ページの上の方に、二次検査の結果を記入する欄がありますので、忘れずにご記入ください。)

二次検査の結果、陽性と判定された方へ

医療機関で二次検査（尿素呼気試験）を受けた結果、陽性と判定された方はピロリ菌に感染していると考えられますので、ピロリ菌の除菌治療をお勧めします。

一般的には、30歳くらいまで（女性では妊娠前まで）の早期に除菌することで胃潰瘍や十二指腸潰瘍の予防に加え、より確実な胃がんの予防効果が見込めると言われています。

ピロリ菌は、胃の中にずっと住み続け、症状がなく感染が続くことで胃炎が進行し、萎縮性胃炎（胃の粘膜が薄くなる）になり、胃潰瘍や十二指腸潰瘍も引き起こします。一番の問題は、胃炎の進行で、将来、胃がんを発症する危険があることです。日本で発見される胃がんの98%がピロリ菌感染によるものであることがわかっています。

また、お子さんがピロリ菌陽性である場合、家族の中にピロリ菌に感染している方がいる可能性が非常に高いと言われています（子どものピロリ菌感染の約80%は家族内感染と言われている）ので、この機会に、家族の方もピロリ菌検査を行うことをお勧めします。

除菌治療を希望される方は、同封の「二次検査および除菌治療実施医療機関一覧」に記載されている医療機関にご相談の上、除菌治療を受けてください。

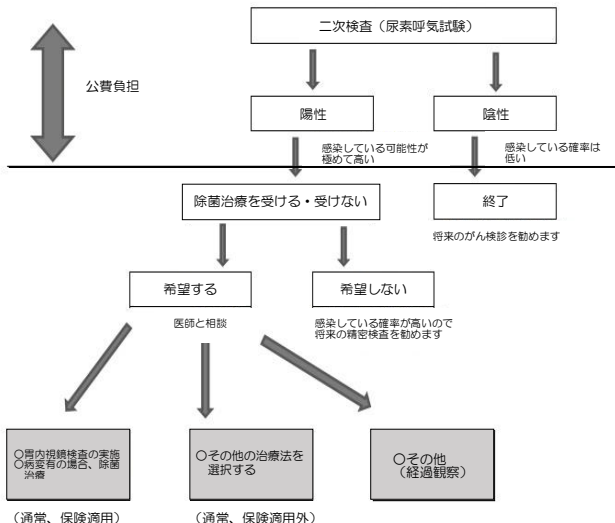
なお、除菌治療を「成人になってから」行う場合には、本手帳を持参の上、内科または消化器内科（消化器科）を標榜する医療機関に相談のうえ、受診してください。

（本手帳1ページの上の方に、二次検査の結果を記入する欄がありますので、忘れずにご記入ください。）

除菌治療にかかる費用は自己負担です。

ピロリ菌の除菌治療について

1) 除菌治療までの流れ



2) 除菌治療の考え方

これまでの研究では、感染して間もない若い世代（30歳くらいまで）に治療（除菌）を行うとピロリ菌によって起こる胃がんの発症をほぼ100%予防できるとされています。このことから、尿素呼吸試験の結果「陽性」と判定されたお子さんの除菌治療については、子どもの成長等を勘案し、その実施時期を慎重に判断する必要があると考えていますので、医師と十分に相談し、保護者・生徒本人の同意の上、行うことをお勧めします。

また、感染原因はピロリ菌に感染している家族からの感染（家庭内感染）が約80%を占めていますので、子どもがピロリ菌に感染していると、その家族（保護者等）が感染している可能性が高いことから、家族の方もピロリ菌検査を受けることをお勧めします。

① 保険適用による除菌治療

除菌治療は、実施医療機関が生徒および保護者の同意を得て実施します。

その際、内視鏡検査、除菌薬投与などの治療内容の説明、2か月後の尿素呼気試験の実施と結果説明、その後の注意事項を説明します。

除菌治療は、国が定めた手順に則って医療機関が実施すると、原則、保険適用となります。

保険適用の除菌では、「内視鏡検査で胃炎の確定診断がなされたもの」となっていることから、本人への負担は大きいと考えられますので、本人、保護者への十分な説明と同意が必要です。

【保険適用による除菌治療のメリット・デメリット】

○メリット：・一次除菌が成功しなかった場合は、二次除菌まで保険適用で治療ができる。

・万が一、重篤な副作用等が生じた場合は、国の医薬品副作用被害救済制度を利用した救済が可能である。

○デメリット：・除菌薬の効能効果欄に「通常、成人（15歳以上）は」となっていることから、中学生の治療に適用している例は少ない。

・胃内視鏡検査が必須となっていることから、本人の負担が大きい。

・一次除菌の成功率が、50～60%と低い（二次除菌まで実施するとほぼ100%の除菌率となる）。

② 自由診療による除菌治療

自由診療による除菌治療については、実施医療機関が、除菌薬投与などの治療内容の説明、2か月後の尿素呼気試験の実施と結果説明、その後の注意事項を説明し、生徒および保護者の同意を得て実施します。

【自由診療による除菌治療のメリット・デメリット】

○メリット：・中学生から除菌治療ができる。

・二次除菌薬を服用することから、1回の治療での除菌効果が高い。

・胃内視鏡検査を行わないことから、本人の負担はない。

○デメリット：・保険適用ではないので、治療費が高い。

・治療に使用する薬剤は、医療用医薬品添付文書では「小児等に対する安全性は確立されていない（使用経験が少ない）」と記載されている。

・自由診療で生じた副作用の治療費は、原則、全額自己負担となります。（治療を行う場合には、薬の副作用等に関して十分な説明を受け、納得のうえ、治療を行ってください。）

③ その他

経過観察とする場合。

保護者によっては、除菌薬の内服による副作用の心配等のため、除菌治療を希望しない場合もあります。

その場合は、①胃がんの発症にピロリ菌感染が関与していること

②日本や韓国などのアジア圏域に広がっているピロリ菌は、胃がんを発症しやすい菌であること

③日本で発見される胃がんの98%がピロリ菌感染によるもので、「胃がんは感染症」と言われていること

④ピロリ菌は一度感染すると胃の中にずっと住み続け、炎症を起こし、感染が続くことで胃炎が進行し、萎縮性胃炎（胃の粘膜が薄くなる）になり、胃潰瘍や十二指腸潰瘍を引き起こし、将来、胃がんを発症させる危険性が高まること

をご理解ください。

また、これまでの研究結果から、感染して間もない若い世代（30歳くらいまで）に除菌治療を行うと胃がん発症の予防効果が高いことが明らかとなっていますので、早めの除菌治療をお勧めします。

特に、女性の場合は、妊娠前に除菌治療を受けるようお勧めします（次の世代への感染予防）。

【除菌治療の方法】

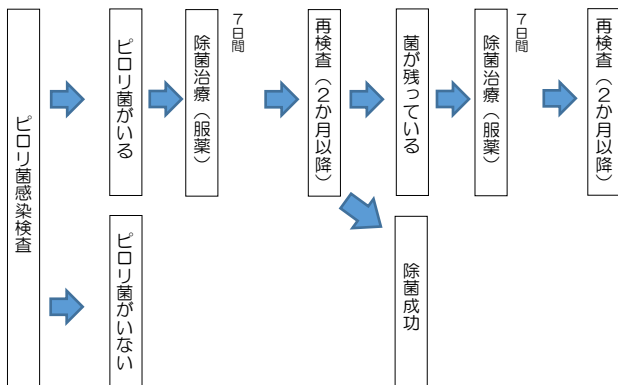
ピロリ菌の治療（除菌治療）は、胃酸を抑える薬と抗菌薬2種類の計3種類の薬を1週間（朝・夕）内服します。忘れずに全て内服することが大切です。

保険診療での除菌治療では、1回目の治療で除菌できなかった場合には、抗菌薬を一部変更して2回目の治療を行います。

2回目の治療でも除菌できなかった場合は、医師と相談し、治療を中止するか、自由診療で3回目の治療を行うか相談してください。



【除菌治療の標準的な流れ】



【除菌治療の副作用と健康被害について】

下痢や軟便は、ピロリ菌を殺すために飲む抗菌剤のために大腸の善玉菌も減少するため、一番多い副作用です。1日数回程度の軽い下痢、軟便の場合は治療を継続します。脱水になるほどのひどい下痢や血便の場合には、治療を中止して主治医の先生に相談してください。



その他、口内炎や味覚障害(味が少しおかしく感じる)、軽い吐き気などの副作用が現れることがありますが、いずれも治療が終わると自然に治るため軽度であれば治療を継続します。



一番注意が必要な副作用は、お薬に対するアレルギーです。軽いじんま疹程度の場合が殆どですが、ごく希に(1000人に1人より少ない割合)で呼吸する気道が腫れて息が苦しくなったり、血圧が低下するなどアナフィラキシーという状態になることがあります。

日本の小児で除菌治療の安全性や副作用について調査した全国調査の結果(2013～2014)では、除菌治療を行った18歳以下の小児・青年のうち、副作用は全体で14.7%に認め、その内訳は、軟便が4.1%、軽度下痢が5.2%、発疹2.1%などでした。また、治療による死亡や後遺症など、重篤な副作用はありませんでした。

【副作用が生じた場合の対応について】

副作用に対して治療が必要な場合は、通常の診療を行います。万が一、重篤な副作用が生じた場合には、最善の治療を行うとともに、保険適用の有無などの事情に応じて、医薬品副作用被害救済制度などを用いて、最善の対応をします。

【除菌することで起こる病気】

除菌治療を行うと、胃粘膜が正常化するため、「胃酸過多」になる可能性があります。その結果、逆流性食道炎を発症し、胃酸によって食道を傷つけ、食道の炎症を起こす可能性があります。多くの場合は、一時的な症状で、治療が必要となることは少ないといわれていますが、除菌治療後に、「胸焼け」や「苦い水（胃酸）が上がってくる」、「ゲップがよく出る」などの症状を訴えることが増えた場合には、除菌治療を受けた医療機関への相談をお勧めします。

【ピロリ菌感染による将来の病気を予防するためにお願ひしたいこと】

早期（30歳くらいまで）に除菌治療をすることで将来の胃がんをほぼ確実に予防できると考えられています。しかし、ピロリ菌に一度も感染していない人と比べると胃がんのリスクが大きいと予測されています。そのため、症状がある場合には過信せず医療機関を受診してください。また、将来、胃がん検診など胃の検査を受ける機会があった場合には是非検査を受けてください。

治療を希望しない場合には、胃・十二指腸潰瘍やポリープ、胃がんになるリスクがあることをご理解いただき、症状がある場合の受診や将来の胃がん検診を強くお勧めします。

また、全ての検査は100%の精度ではないため、検査結果で陰性だった場合も除菌治療を行って成功した場合も、検診や医療が必要な場合は検査を受けてください。